

言葉は思想の衣裳

—— スウィフトの言語観 —— *

田 中 一 穂

スウィフト (Jonathan Swift) は一方では国語統制機関の創設などを唱えて英語を標準化しようとする運動に肯定的であった反面、他方、言葉遊び、暗号通信などにも興味を示し、言葉を崩していくことにも否定的ではなかった。⁽¹⁾しかし標準化などと言ってもスウィフトの場合、理論が必ずしも実践と結びついているわけではなく、⁽²⁾自らの理論を作品で戯画化する場合も少なくなかった。逆に言葉遊びなどと言っても巷で横行しているそれを自ら演じながら批判的に諷刺の対象とする場合は、確固たる秩序を暗に前提としていることになる。⁽³⁾ こうした言葉の固定化対流動化の狭間でスウィフトの言語観が如何に揺らいでいるかを以下では考えてみたい。

言葉の標準化と濫用の問題は十七世紀の有名な常套句「言葉は思想の衣裳」⁽⁴⁾の比喩を借りて摧いて言えば次のようになるだろう。すなわち、人間は社会に適応するためには裸体を適当な衣服で隠さねばならぬように、なまの思考には適切な言葉を着せなければいけない、と。⁽⁵⁾ ベン・ジョンソン (Ben Jonson) などは「いくら高尚な話題でも言い方が悪いとつまらなくなる。それは喩えて言えば国の偉い政治家がだぶだぶの半ズボンをはき、ガードルの間に手袋をはさみ、チャラチャラした飾りをいっぱいつけた服を着ているのを見れば、誰だって笑わずにはいられないのと同じこと」⁽⁶⁾と述べ、スプラット (Thomas Sprat) などは「真実というものを言葉で表現するためには、すなわち肉体に服を着せてということだが」“to represent *Truth*, cloth'd with *Bodies*”⁽⁷⁾と述べ、またドライデン (John Dryden) なども「言葉は思想の装飾

品であるのだが、選び方が悪いとみっともない着こなしになる」⁽⁸⁾であるとか、あるいは「表現は故に思想を慎やかにおおう衣裳なのである。ちょうどズボンやベチコートが我々の肉体をおおうように」“expressions therefore are a modest cloathing of our thoughts, as Breeches and Petticoats are of our bodies”⁽⁹⁾などと述べている。ポープ (Alexander Pope) の『批評論』 (*An Essay on Criticism*, 1711)⁽¹⁰⁾の中の人口に膾炙した一節 “Nature to advantage dress'd” (line 297) などともついで “Nature” の意味が深読みされがちなところであるが、「衣裳を着て」 “dress'd” に注目して前後のカプレットを読み直してみれば「本当に気のきいた言い回しとは素っ裸な姿に見栄えよく衣裳を着せること、しばしば考えられてはきたが、これほどうまく表現されたのは、初めてだ、というもの」 “True Wit is Nature to advantage dress'd, / What oft was thought, but never so well express'd” (297-98) と「言葉は思想の衣裳」の比喩が基になっていることがわかる。実際、ポープはこの数行あとで「女が男を服装で評価するのと同じ様に、書物の言葉を評価する人がある」 (305-06) と述べ、そのものずばり「表現は思想の衣裳」 “Expression is the dress of thought” (318) と言い切り、続けて「大げさな表現は田舎者が国王の衣裳をつけたようなものだ」 (320-21) と述べるのである。

スウィフトも、もちろん「言葉は思想の衣裳」の比喩を十分、知悉していた。『雑感』 (*Thoughts on Various Subjects*, 1711) の中では「一般の話し手には一組の観念とそれら観念に衣裳をまとわせる一組の言葉しかない」 “……common Speakers have only one Set of Ideas, and one Set of Words to cloath them in”⁽¹¹⁾ と述べて簡潔を旨とする表現法を讃え、また1710年9月28日付『タトラー』 (*The Tatler*) 第230号の中では綴字改革問題に触れながら「発音どおりに綴り字を改革しようと企んでいる一派がいるが、とんでもない標準化だ！ 言葉は思想の衣裳 (Words are the Cloathing of our Thoughts) なのだから、伊達男の気まぐれに頼っていたら、切り捨てたり自分勝手に形を変えたり、それこそ普段の服を着替えるよりも頻繁に変えることになりかねない」 (2:176) と述べ、あるいは同じ綴字改革派に言及して「体に服を合わせれば問題はないのに、それでは服に体を合わせるようなものだ。そんなことを言う者は体に服を合わ

せないで、服に体を合わせればよからう」(4:11)などと痛烈な皮肉を述べるのである。要するに言葉の濫用と標準服の問題を衣裳の比喩で言い換えれば、余計な飾りをつけすぎても切りとりすぎてもいけない、つまり言葉の標準化の問題はいわば制服、あるいは標準服の問題として当時の作家たちには考えられていたのである。したがってスウィフト初期の作品『桶物語』(*A Tale of a Tub*, 1704)の本筋においてピーター(Peter)が父親の遺言書に逆らって街の流行に合わせて余計な飾りをいっぱいつけて着飾っていく様子や、逆にジャック(Jack)が服を切り裂き破ってみじめな格好になっていく場面は、一義的には従来の解釈、すなわちキリスト教寓意物語としてとらえれば、カトリック教会の象徴であるピーターが聖書の権威を軽んじて華美な儀式に傾倒していく過程と、ピューリタンの象徴であるジャックが華美になりすぎた教会の儀式を廃し、聖書至上主義を唱える過程と対応しているのにすぎないが、二義的にはこれらの場面は「言葉は思想の衣裳」の比喩を基にした言葉の濫用と標準化の寓意物語としても再解釈可能なのである。実際、ピーターやジャックが言葉と物の対応関係に極端に神経質になるある言語学者の身ぶりを示す例を『桶物語』の中から拾いあげるのにはわけもない。⁽¹²⁾ また宗教寓意的にも英国国教会を象徴し中庸を保つマアチン(Martin)は適度な衣服を身につけ、言語寓意的にも中庸を保ち、登場場面は少ないながら言葉の標準化の一側面を担っている人物と言えよう。こうした三人兄弟の物語が始まる直前、本筋の導入部に登場する謎めいた万物衣裳神なども「衣裳=言葉」の比喩を背景に作品全体が言語の寓意物語であることを暗示している。そこには大掛かりで奇想天外な神殿の装置が出現するが確かに「アイロン」「Goose」(1:46)や「針」「Needle」(1:46)などを駆使する仕立て屋のイメージが背後にはある。せっせと製造されては捨てられていく切れ端などは、日々つくりだされては消えていく流行語の運命をも暗示しているのであろう。この宗派の信仰体系は「万物は衣裳である」
 “the Universe to be a large *Suit of Cloaths*, which invests every Thing”(1:46)という根本教義に基づいている。すべての物をおおう衣裳とはまた言葉に他ならず、精神の特性さえも様々な衣裳にすぎない。その組み合わせ自体は無意味なある抽象名詞と様々な衣裳のペアは、クウィンラン(Maurice J.

Quinlan) の句を借りて言えば「メタファーの敷衍化」“literalization of metaphor”⁽¹³⁾すなわち「言葉は思想の衣裳」という比喩そのものの敷衍化が行なわれていると考えられよう。

Is not Religion a *Cloak*, Honesty a *Pair of Shoes*, worn out in the Dirt, Self-love a *Surtout*, Vanity a *Shirt*, and Conscience a *Pair of Breeches*, which, tho' a Cover for Lewdness as well as Nastiness, is easily slipt down for the Service of both. (1 : 47)

続いて衣裳それ自体に理不尽に生命が与えられ、動き、話し始めるのも「言葉＝衣裳」の比喩の肥大化によるものにすぎず、また人間が肉体と靈魂の二組の衣裳から成る、とは肉体と靈魂という分類法もまた、二組の言葉、呼び名にすぎないことを示しているのである。

Man was an Animal compounded of two *Dresses*, the *Natural* and the *Celestial Suit*, which were the Body and the Soul: That the Soul was the outward, and the Body the inward Cloathing... (1 : 48)

この様に『桶物語』では本筋の導入部ならびに本筋において常套句「言葉は思想の衣裳」が様々な形を採りながら変奏されているが、服に余分な物をつけたり、あるいは破ったりするピーターやジャックや、また切れ端を製造しては捨てていく万物衣裳神の例など、概して『桶物語』においては言葉の濫用の側面が特に強調されて寓意化されていることが多い。これとは対照的に言葉の標準化の側面が前景化されている作品は『ドレイピア書簡』(*The Drapier's Letters*, 1724-25)である。以下、簡単に分析する。

『ドレイピア書簡』は元来は偽銅貨と変わらぬ悪貨を铸造しようとしたウイリアム・ウッド(William Wood)を、スウィフトがドレイピア(M. B. Drapier)というペンネームを借りて告発する政治パンフレットである。しかし“Drapier”という名前それ自体が暗示するように、“Drapier”とはまた

“draper”（服屋）の変形した形に他ならず、彼は（標準）服を編み出す者、言葉の秩序化をめざす者でもあるのだ。⁽¹⁴⁾ 作品『ドレイピア書簡』全体は悪貨鋳造者ウッド告発の声調で貫ぬかれてはいるものの、その告発の手口をみれば、ある言葉の意味、解釈、語法をめぐる議論が長々と続き、服屋ドレイピアはまるで国語学者のような身ぶりを示すのである。一例を挙げれば、「大権」“*Prerogative*”（10：54）という言葉の意味についてドレイピアが諄々と議論する場面がある。そこではウッドの偽金を拒否することを国王の大権に従わないことと同一視するウッド派の非難に対してドレイピアは反論を唱えてはいるが、“*Prerogative*”という単語の執拗なまでの反復によって議論自体がひとり歩きしているのである。そこにはもはや被告ウッドの姿は消え、言葉の意味に執拗に拘泥する国語学者ドレイピアの姿しかない。言葉の意味に執拗に拘泥する国語学者ドレイピアの例はなにもこれだけにとどまるものではない。⁽¹⁵⁾ しかし問題は言葉の意味にこだわる彼の執拗さというより、むしろそのこだわりかたであろう。ドレイピアは決して『桶物語』のピーターやジャックのように言葉の濫用の側面を具現化する人物ではない。ドレイピアが重視するのは「言葉の平明な意味」“*the plain Meaning of the Words*”（10：9）であり、「直截的な言葉」“*direct Terms*”（10：121）なのだ。ドレイピアが服屋なのは「言葉は思想の衣裳」の比喩を体現化しているのと同時に、決して身分の高くない一庶民の出でもあることを強調するためでもある。誰にでも理解できる言葉で誰にでも理解できるように語るのがドレイピアの使命である。⁽¹⁶⁾ 「平明な事実の物語」“*the plain Story of the Fact*”（10：4）を語ろうとする彼は決してピーターやジャックのように己れの耳を閉ざすことなく、広く庶民の意見を聞く姿勢を示すのである。第一書簡、第二書簡で、自らが一庶民の服屋でしかないことを示したドレイピアが第五書簡に至っても尚、自己紹介を繰り返し、自らが服屋であることを強調するのは、子供の頃の言語習得の話題をもちだすことによって自らの職業が「言葉は思想の衣裳」の比喩の具現化であることを再度、仄めかすのみならず、階級の低い人々が素朴な布（言葉）“*a plain, strong, coarse Stuff*”（10：82）を欲していることを暗示するためでもある。したがって階級の少々高い人々がドレイピアから買った服を脱ぎ捨てた、という逸話は

階級の高い人々は庶民の言葉を解さない、という意味をも言外に含んでいるのである。何故なら階級のもっとも高い人物、ドイツから来たハノーバー（Hanover）朝の開祖ジョージ一世（George I）が英語を全く知らなかったことが、痛烈に批判されている箇所があるからである。

First, it is well known, his Majesty is not Master of the *English* Tongue; and therefore, it is necessary that some other Person should be employed to pen what he hath to say, or write in that Language. (10 : 69-70)

また『ドレイピア書簡』においては「衣裳＝言葉」という鍵喩と共に重要な「貨幣＝言葉」という鍵喩が隠されている。これは元来“coin”という動詞が「貨幣を鑄造する」という意味と共に、「新造語をつくる」という二つの意味から成り立っていることから生じているものであり、服屋ドレイピアの攻撃対照であるウッドは「新しい偽金を造る」“to Coin New Ones”（10 : 4）と同時に、新造語を駆使し、言葉の濫用を煽る者でもあるのだ。というのも十七世紀言語論争上、有名な句「言葉の濫用」“Abuse of Words”⁽¹⁷⁾や、「言葉の恣意性」“a Word is made arbitrarily...”⁽¹⁸⁾などが、その句を基にしながら、しかも「言葉」の代わりに「貨幣」と言い換えてある箇所があるからだ。「貨幣の濫用」“the Abuses of Coin”（10 : 127）といい、「貨幣の価値は恣意的」“the Value of Money is arbitray”（10 : 128）といい、表面的には悪貨鑄造業者の悪業を告発してはいるが、問題はその表現に「言葉の濫用、恣意性」という常套句を二重焼きにしていることであろう。『ドレイピア書簡』においては貨幣そのものに関する議論が展開される時、驚くほど言語に関する議論と類似している場合が少なくない。考えてみればそもそも貨幣とは奇妙な物ではある。その価値は名称によって階層づけられている。金属片にたいする最初の命名が価値体系を固定する。デノミネーションとは貨幣の単位であると同時に諸物を階層に分類整理する言葉の命名でもあるのだ。鉛、真鍮、銅に他の金属、貝殻、皮革等をでたらめに混ぜたものをスターリングなどと呼ぼうものならデノミネーションは崩壊せざるをえない。

SECONDLY, How far the Prerogative extends to force Coin upon the Subject, which is not Sterling; such as Lead, Brass, Copper, mixt Metal, Shells, Leather, or any other Material; and fix upon it whatever Denomination the Crown shall think fit? (10 : 108)

もしウッドの方策を許すならば、あらゆる材料をギニーとかファージングなどと名付けて貨幣として良いことになる。

Let Mr. *Wood* and his Crew of *Founders* and *Tinkers* coin on till there is not an old Kettle left in the Kingdom: Let them coin old Leather, Tobacco-pipe Clay, or the Dirt in the Streets, and call their Trumpery by what Name they please from a Guinea to a Farthing; we are not under any Concern to know how he and his Tribe or Accomplices think fit to employ themselves. (10 : 17)

デノミネーションの混乱は貨幣単位の混乱であると同時に命名の混乱でもある。「言葉とは物の名称にすぎない」「Words are only Names for *Things*」(11 : 185) のだから、と言葉と物との恣意的関係を嫌い、言葉と物の一対一対応を夢みて物々対話に頼ったラガド (Lagado) の物言語と同様に、貨幣単位混乱の究極の肅清方法は原始的な物々交換なのだ。

FOR my own Part, I am already resolved what to do; I have a pretty good Shop of *Irish Stuffs* and *Silks*, and instead of taking Mr. WOOD's bad Copper, I intend to Truck with my Neighbours the *Butchers*, and *Bakers*, and *Brewers*, and the rest, *Goods for Goods*, and the little *Gold* and *Silver* I have, I will keep by me like my *Heart's Blood* till better Times, or untill I am just ready to starve, and then I will buy Mr. WOOD's Money, as my Father did the Brass Money in King *James's* Time; who could buy *Ten Pound* of it with a *Guinea*, and I hope to get as much for a *Pistole*, and so

purchase *Bread* from those who will be such Fools as to sell it me.

(10 : 7)

貨幣と言葉の共通項とはそれが共に物の媒介であることであろう。媒介の消去は物それ自体の前景化を生む。物々対話といい、物々交換といい、それは共に浮遊するシニフィアンを嫌いシニフィエの固定化をめざすことに他ならない。

「貨幣＝言葉」の比喩関係は物の媒介を共通項とする必然的結合なのである。貨幣の定義が言葉の性質に驚くほど似かよっているのは偶然ではない。媒介とは世界を分節化し、かつ統一する機能をも果たすからである。

Money, the great Divider of the World, hath, by a strange Revolution, been the great Uniter of a most divided People. (10 : 61)

固定した物のまわりを浮遊する言葉と貨幣が等価物であることを示唆する例は上記引用にとどまらない。もし言葉がなければ貨幣もただの金属片にすぎず、価値をもつのは物それ自体である、という次の引用もまた言葉と貨幣の同等の関係を示唆している。

For those who, in the common Phrase, do not *come hither to learn the Language*, would never change a better Country for a worse, to receive *Brass* instead of *Gold*. (10 : 61)

「貨幣＝言葉」の比喩関係が必然であるとはつまるところ物の命名の問題に帰着するようである。つまり物の媒介としての「貨幣＝言葉」という認識は「言葉は思想の衣裳」の比喩とも通有しているのである。ウッドが悪貨鑄造業者であることのみならず、様々な衣裳を着せられ、奇妙な姿で幾度となく登場するのはそのためでもある。ただし「衣裳＝言葉」の比喩をまっとうに背負って登場した服屋ドレイピアとは対照的に、ウッドの場合はいささか滑稽な姿で登場する。全身、真鍮の鎧甲で身を固めて登場する時があれば、

For Goliath had a *Helmet of BRASS upon his Head, and he was armed with a Coat of Mail, and the Weight of the Coat was five Thousands Shekles of BRASS, and he had Greaves of BRASS upon his Legs, and a Target of BRASS between his Shoulders.* In short, he was like Mr. Wood, all over BRASS... (10 : 48)

また顔面に数個の貨幣を等間隔に貼り付けて死刑台に登ることもある。

THEN appeared *William Wood, Esq;* represented to the Life by an old Piece of carved Timber, taken from the Keel of a Ship. Upon his Face, which looked very dismal, were fixed, at proper Distances, several Pieces of his own Coin, to denote who he was, and to signify his Calling, and his Crime. He wore on his Head a Peruke very artfully composed of Four old Mops; a Halter about his Neck served him for a Cravat. His Cloaths were indeed not so neat and elegant as is usual with Persons in his Condition; which some censorious People imputed to Affectation; for he was covered with a large Rugg of several Colours in Patch-Work...

(10 : 147-48)

ウッドの場合、衣裳が貨幣であることに注意しよう。この“Coin”はもちろん混ぜ物であり、言語寓意物語的には“coinage”の意味であり、ウッドは言葉の濫用者の象徴なのである。貨幣制度に関して言えば、“Standard” (10 : 11) から逸脱していくのがウッドであるのに対し、“Standard”を維持していくのがドレイピアである。もちろんこの場合、“Standard”とは貨幣制度の価値基準を表すと共に国語の標準をも示している。

「衣裳」にせよ「貨幣」にせよドレイピアとウッドではそれらへの関わり方がまるで正反対であり、そのことはとりもなおさず「言葉」に対する彼らの関わり方の相違を象徴していた。このように『ドレイピア書簡』をもしメタ言語の寓意物語として読むならば、作品全体を通じて何気なく書かれた箇所にも気

になるところが少なくないように思われる。たとえばドレイピアが自分の店の服をウッドの貨幣と引き換えにはまったく売る気がないことを示す場面は、⁽¹⁹⁾一義的にはドレイピアがウッドの偽金で損をしたくないことを示しているのにすぎないが、二義的にはドレイピアの推奨する標準語をウッドの曖昧語で汚したくないことを暗示してはいないだろうか。またドレイピアが幾度となく、外国産の布を嫌い自国の布を推めるのは、もちろん当時の経済的状況の反映にすぎないのかもしれないが、言語寓意的には大量に氾濫する外国語を嫌い純粋な母国語を守ろうとする姿勢をも示してはいないだろうか。⁽²⁰⁾ また最後の書簡はドレイピアが現実の人物ウッドに死刑の判決を下し、作品の中で処刑するという辛辣な構成をとっているが、その結末部、ウッドの今際の際の「言葉」は象徴的であると言えよう。死後、初めて彼の遺言は「金」の文字で記されるのである。

His dying SPEECH was printed, and deserves to be written in Letters of GOLD. Being asked whether it were his own true genuine SPEECH, he did not deny it. (10 : 149)

ウッドの言葉（貨幣）は生きている間には意味（価値）がなく、死後、初めて意味（価値）をもつとは、ドレイピアのウッドに対する究極の皮肉であろう。

以上、従来の解釈では宗教寓意物語としか見做されなかった『桶物語』の本筋や、政治パンフレットとしか見做されなかった『ドレイピア書簡』が共に言葉の濫用と標準化の主題を内に秘めていたことをみてきた。これらの作品は表面上は宗教、あるいは政治の仮面をかぶりながら、その実、深部においては言語問題を寓意化していた、と言える。これに対してスウィフトの作品の中には題名からもすぐわかるように表面上、直接、言語問題を扱っている作品がある。それは『祖語英語論』(A Discourse to Prove the Antiquity of the English Tongue) と『国語改善案』(A Proposal for Correcting, Improving and Ascertaining the English Tongue) の二つである。もっともこの二つの作品は共に言語問題を直接、扱ってはいるものの、その扱いはまるで正反対なものである。『祖語英語論』

はある言語学者の学術論文のパロディであり、どちらかと言うと巫山戯た作品であるのに対し、『国語改善案』は国語の標準化という主題に真正面から真面目に取り組んだ作品だからである。以下、この二つの作品を手短かに分析する。

『祖語英語論』の作品成立の背景には十七世紀に特に顕著になった言語の起源を求める運動があった。当時、最初にアダムが話していたのはいったい何語であったのか、などという議論が真しやかにかわされてもいたのである。もしそれがわかれば現状の国語の乱れを正す統一した言語を回復できるのではないか、などと甘い夢を追い続けた学者もいたのである。こうした言語の起源を追求する運動は容易に語源探索の姿勢と結びつく。⁽²¹⁾ ことあるごとに語源をもちだしては現状の言葉の意味を改変しようとする似非語源学者を諷刺の対象とした作品が『祖語英語論』である。一般に語源学者はある英語の単語をとりあげて、その語の語源はたとえばギリシア、ラテン語の何某であり、そこから派生して現在の語になったのだ、などと主張する。ところが『祖語英語論』の語り手である学者は、あるギリシア語やラテン語が実は英語からできていて、故にギリシア・ローマ時代には英語が話されていたのだ、と最後に結論するのである。一例を挙げれば、軍神マルス (Mars) の語源は “my a-se” (4 : 234) であり、それが《My-a-se→M'as→Mars》と変化したそうである。結局、『祖語英語論』では語源学者、延ては祖語探求学者の身ぶりを逆手にとることによって、いたずらに祖語を探求することは何ら現状の国語改善に寄与するものではない、ということが主張したかったのであろう。そこで国語の標準化という主題に真正面から取り組んだ作品が『国語改善案』である。『国語改善案』にはまず「我々の国語はとて不完全に毎日いくら改善しようとしても日々悪化する一方であり、国語を洗練しようとする当の輩が濫用を増長している始末である」(4 : 6) という認識が根底にあり、そこで題名にあるように国語を正し改善し固定化する方法を考えたらよからう、という議論が展開されていく。しかし標準化と言っても決して完璧な標準化をめざしているわけではなく、ある程度の余裕はみているのであり、「言語は必ずしも完全でなくても良いのであって、絶えず変化して違った言語になるよりは少々の悪化には目をつむるべき」(4 : 14) なのである。変化 (changing) と完全 (perfection) に関

する以上の議論はスウィフト晩年の大作『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver's Travels*, 1727)において「絶えず変化する言葉」“THE Language of this Country being always upon the Flux” (11 : 213) を話すストラルドブラグ (Struldbrug) の言語と、完全を象徴するフウイヌム (Houyhnhnms) の言語にそれぞれ寓意化されはする。しかし『国語改善案』という作品それ自体は決して『桶物語』や『ドレイピア書簡』のように深部において言語問題を寓意化しているのでもなければ、表面上、言語問題を扱っている点においては共通してはいるものの、主張していることとは裏腹の意図を奥に秘めている『祖語英語論』などとも正反対の作品なのである。要するに『国語改善案』は表面上、言語問題について主張しているまさにそのことしか言っていない作品なのである。したがってほとんどの作品をペンネームで発表しているスウィフトがこの『国語改善案』に関しては、作品の最後に“J. SWIFT” (4 : 21) と署名を残していることは、やはり意味のあることだと言わねばならない。

以上、一口に言語問題と言っても様々なレベルで作品化されるのを見てきた。こうした表面では宗教や政治問題を扱っているようにみせかけながら、実は言語問題を寓意化している手法、また表面上、言語問題を扱いながらも、その意図はと言うと、主張とは裏腹なことを隠している手法、あるいは正面から言語問題を扱い、それ以下でもそれ以上でもない手法などが集積的に構造化された作品が『ガリヴァー旅行記』であると言えよう。以下、簡潔に分析する。

主人公ガリヴァーは医者であり船医として航海に出るが、第一部リリパット (Liliput) への旅、第一章の劈頭、彼はなによりも語学の達人であることが強調されている。未知らぬ土地に漂着したガリヴァーを最初に魅きつけるのは聞き慣れぬ言葉なのだ。ガリヴァーが自ら積極的に興味をもつのは小人たちの奇形でも彼らの奇矯でもなくなによりも言葉なのである。“Hekinah Degul” (11 : 22)、“Tolgo Phonac” (11 : 22)、“Borach Mivola” (11 : 24)、“Peplom Selan” (11 : 25) など小人たちの言葉を繰り返し聞くガリヴァーはそれらを習得しようとする。したがって第一部第二章においてリリパット国の皇帝その他の人物の服装の描写が諄々と続いたあとに、唐突にガリヴァーの語学力がこれ見よがしに披瀝されるのは意味のないことではない。またしても「言葉は思想の

衣裳」の変奏であり、リリパット国民の衣裳もまた言葉の象徴なのである。しかも十七世紀イギリスにおける散文改革運動の標語のひとつである“plain and simple”という形容詞がリリパット国民の衣裳にも用いられていることに注意しよう。

His Dress was very plain and simple, the Fashion of it between the *Asiatick* and *European*... There were several of his Priests and Lawyers present (as I conjectured by their Habits) who were commanded to adress themselves to me, and I spoke to them in as many Languages as I had the least Smattering of, which were *High* and *Low Dutch*, *Latin*, *French*, *Spanish*, *Italian*, and *Lingua Franca*; but all to no purpose. (11 : 30-31)

『ガリヴァー旅行記』は異国語間のコミュニケーション不能を主題のひとつにしている。背景には十五世紀以降、航海術の発達による西欧世界と異文化間の接触の問題がある。西欧世界内部にさえ言語の壁が幾重にもあることに気づいていた西欧人はそれとも全く異質な言語の存在にも当惑を禁じえなかった。既存の西欧中心主義がぐらつきはじめるのである。ギリシア・ローマ文明にせよ過去は文字によって伝承されてきた。しかし聞き慣れぬ音のみの言葉の存在を知った時、過去にも音だけの言語をもち何の痕跡も残さず消えていった文明の存在の可能性が膨らむ。文字によって伝承されてきた文明などはその一部分にすぎない。母国のみならず文明人としてのアイデンティティに疑惑が生じるのである。ガリヴァーが最終的に行きつく第四部フウイヌム国の言語に「文字がない」“THE *Houyhnhnms* have no Letters” (11 : 273) のは文明人ガリヴァーのアイデンティティを問うためでもある。しかしフウイヌム国に辿着くまでには様々な言語の国々を通過しなければいけない。それらは概してはたから見れば馬鹿馬鹿しい文明国内部の言語戦争にすぎない。どの国民も母国語が最上である、と信じて疑わないことが戯画化されているのである。リリパット国対ブレフスキュ (Blefuscu) 国の戦争の原因なども両国間の言語の相違によるものにすぎないのである。

ともあれリリパット国において言語の相対性に目覚めたガリヴァーは第二部
 プロブディングナグ (Brobdingnag) 国においても外国語学習に励む。プロブ
 ディングナグ語の語学の先生はグラムダルクリッチ (Glumdulclitch) である。
 ガリヴァーの洋服の仕立てをする彼女の描写が続いたあとに唐突に語学の先生
 としてのグラムダルクリッチが紹介されるのも意味がある。農夫の娘グラムダ
 ルクリッチを絶望の書『ガリヴァー旅行記』の中の唯一の救いを象徴する人物
 であるとしたり、あるいは伝記批評的に彼女はスウィフトが生涯想いを寄せた
 ステラ (Stella) の反映であるなどとみる素朴な批評が時にあるが、彼女はこ
 こでも「言葉＝衣裳」の比喩を背負った仕立て屋として登場する語学の教師に
 すぎない。

She made me seven Shirts, and some other Linnen of as fine Cloth as
 could be got, which indeed was coarser than Sackcloth; and these she
 constantly washed for me with her own Hands. She was likewise my
 School-Mistress to teach me the Language: When I pointed to any thing,
 she told me the Name of it in her own Tongue, so that in a few Days I
 was able to call for whatever I had a mind to. (11 : 95)

初期の作品『桶物語』によって先鞭をつけ、『ドレイピア書簡』で発展させた
 「言葉＝衣裳」のメタファーを最晩年の作品『ガリヴァー旅行記』においても
 何気なく敷衍するスウィフトの執拗さには少々辟易せざるをえないが、第三部
 浮島ラピュータ (Laputa) に至っても尚、だめ押しの逸話が挿入されている。
 ガリヴァーはラピュータ語を習い、“laputa”という語の語源を『祖語英語論』
 の語源学者よろしく解釈してみせたあと、唐突にラピュータ島の洋服屋の腕の
 不味さに驚く。“my Cloths very ill made, and quite out of Shape” (11 : 162)
 とはラピュータ島の独特の語法を象徴しているのだ。何故なら彼らの語法は数
 学と音楽用語に限定された欠陥言語であることが続いて判明するからである。
 したがってラピュータの無能な服屋のためにガリヴァーが語学の勉強を強いら
 れるのは必然なのである。

DURING my Confinement for want of Cloaths, and by an Indisposition that held me some Days longer, I much enlarged my Dictionary; and when I went next to Court, was able to understand many Things the King spoke, and to return him some Kind of Answers. (11 : 162)

しかしながら『ガリヴァー旅行記』において「言葉＝衣裳」の比喩を隠しながら言語の問題を寓意化する手法が顕著なのはラピュータ島までである。ガリヴァーがラピュータ島の次に訪れたバルニバルビ (Balnibarbi) のラガド大学院 (the grand Academy of Lagado) に至っては言語を直接、己れの研究対象とする数々の言語学者が登場する。四十個のハンドルのついた言語製造機が全ての概念を四十の類概念に分類整理したウイルキンズ (John Wilkins) の業績の戯画であるとまで言い切ったのはウォーカー (Lewis Walker) であった。⁽²²⁾ 確かに言葉と物の一致を夢みた彼らの運動は言語の全廃によって生じた物々対話という「普遍言語」“universal Language” (11 : 186) に戯画化されはする。しかし問題は言葉の濫用を肅清しようとした彼らの運動が実は結果的には更なる濫用を煽っていた点ではなかったか。書類の言葉の意味を勝手に改変する解釈の仕方を正そうとアクロスティクスやアナグラムの方法に頼る学者こそが普遍言語学者の戯画であろう。

WHEN this Method fails, they have two others more effectual; which the Learned among them call Acrosticks, and Anagrams. *First*, they can decypher all initial Letters into political Meanings: Thus, *N*, shall signify a plot; *B*, a Regiment of Horse; *L*, a Fleet at Sea. Or *secondly*, by transposing the Letters of the Alphabet, in any suspected Paper, they can lay open the deepest Designs of a discontented Party. So for Example, if I should say in a Letter to a Friend, *Our Brother Tom has just got the Piles*; a Man of Skill in this Art would discover how the same Letters which compose that Sentence, may be analysed into the following Words; *Resist, -a Plot is brought home-The Tour*. And this is the Anagrammatick

Method. (11 : 191-92)

ともあれガリヴァーはバルニバルビ語を習得し次なる国、不死人間ストラルド
 プラグの住むラグナグ (Luggnagg) において試してはみる。⁽²³⁾ しかし普遍言
 語として全世界に通用するはずのバルニバルビ語は早々ラグナグでは全く通じ
 ない。通訳が必要なのである。普遍言語などと言ってもその理念は存在しても
 現実には存在などしないのである。しかし理念を追求する旅が「ガリヴァーの
 言語の旅」⁽²⁴⁾なのだ。シーバー (Edward D. Seeber) がいみじくも指摘するよ
 うに仮想の理想郷への旅行文学は、大旨、アプリア型にせよアポストリア
 型にせよ現状より優れた言語、すなわち理想言語を求める旅を前提にして
 いる。⁽²⁵⁾ ガリヴァーが最後に辿りつく第四部フウイヌム国が「名と実体の同
 一性、すなわちロゴスのエデン的調和」⁽²⁶⁾を表象し、「ユートピア」⁽²⁷⁾の雰
 囲気を帯びるのはそのためでもある。もし言葉が思想の衣裳にすぎないとすれば、
 思想は比喩的には肉体に他ならない。故に言葉と物の一致の追求が言葉と肉体
 の合体の比喩に転移していったのは蓋し当然なごとであった。⁽²⁸⁾ 最初の創造
 におけるロゴスの役割が重要なのである。「言葉=衣裳」の比喩はフウイヌム
 国においては「言葉=肉体」の比喩に転移しその欺瞞性が暴かれるのである。
 なるほどガリヴァーとヤフー (Yahoo) を截然と区別しフウイヌムを当惑させ
 るのはガリヴァーの裸体をおおう衣服と優れた語学力であり、

He was most perplexed about my Cloaths, reasoning sometimes with him-
 self, whether they were a Part of my Body; for I never pulled them off till
 the Family were asleep, and got them on before they waked in the Morn-
 ing. My Master was eager to learn from whence I came; how I acquired
 those Appearances of Reason, which I discovered in all my Actions; and
 to know my Story from my own Mouth, which he hoped he should soon
 do by the great Proficiency I made in learning and pronouncing their
 Words and Sentences. To help my memory, I formed all I learned into
 the *English* Alphabet, and writ the Words down with the Translations.

This last, after some time, I ventured to do in my Master's Presence. It cost me much Trouble to explain to him what I was doing; for the Inhabitants have not the least Idea of Books or Literature. (11 : 234-35)

ガリヴァーの衣服は言葉を象徴しはする。しかし衣服をもたず毛むくじャらの裸体を晒すヤフーには言語能力など皆無であることを示しているにも拘らず、フウイヌムの裸体は言語の無能を示してはいない。フウイヌムの場合、裸体は自然の完成物であり、「自然」とは“Nature to advantage dress'd”の“Nature”と同義なのだ。

THE Word *Houyhnhnm*, in their Tongue, signifies a Horse; and in its Etymology, *the Perfection of Nature*. (11 : 235)

フウイヌム国においては「裸体＝言葉」が鍵喩などと言っても、不潔な肉体を晒しているヤフーと清潔なフウイヌムではその意味は対照的なのである。ガリヴァーの言語はヤフー的身体を衣服でおおったものにすぎず、衣服を脱ごうと着けようと決して完全を象徴するフウイヌム言語と一致することはない。フウイヌムがガリヴァーの衣服にも裸体にも驚きを禁じえないのは、どちらも不完全な言語であり、決して自然の完全を意味しないからである。ガリヴァーの言語はフウイヌム言語に決して一致することはない。しかし近づくことは可能なのである。ガリヴァーがヤフー的身体をもつことにも、不完全ではあるがそれをおおう衣服を着ることにも一時的にせよ寛容な態度を示したフウイヌムがガリヴァーがフウイヌム言語を学ぶよう望むのはそのためでもある。

I requested likewise, that the Secret of my having a false Covering to my Body might be known to none but himself, at least as long as my present Cloathing should last: For as to what the Sorrel Nag his Valet had observed, his Honour might command him to conceal it.

All this my Master very graciously consented to; and thus the Secret

was kept till my Cloaths began to wear out, which I was forced to supply by several Contrivances, that shall hereafter be mentioned. In the mean Time, he desired I would go on with my utmost Diligence to learn their Language, because he was more astonished at my Capacity for Speech and Reason, than at the Figure of my Body, whether it were covered or no; adding, that he waited with some Impatience to hear the Wonders which I promised to tell him. (11 : 237-38)

第四部フウイヌム国の物語の大半はガリヴァーのフウイヌム言語学習の話題で成立している。単純に図式化して言ってしまうえば、第四部は現状の国語の乱れを背負ったガリヴァーが、より優れた理想の言語、フウイヌム言語を求め挫折する物語にすぎない。諄々と描写されるヤフーの不潔な身体は人間の乱れた言語を象徴する。ヤフーの言語自体が、物語の中で取沙汰されることは少ないが、荒唐無稽な物語の信憑性を読者に保証するために作品に付けられた「ガリヴァーからシンプソンへの書簡」“A Letter from Capt. Gulliver, to His Cousin Sympson”の中では、ヤフーが実は乱れた言葉を話す現実のロンドン(London)の住民と同一視されている箇所がある。

I HEAR some of our Sea-Yahoos find Fault with my Sea-Language, as not proper in many Parts, nor now in Use. I cannot help it. In my first Voyages, while I was young, I was instructed by the oldest Mariners, and learned to speak as they did. But I have since found that the Sea-Yahoos are apt, like the Land ones, to become new fangled in their Words; which the latter change every Year; insomuch, as I remember upon each Return to mine own Country, their old Dialect was so altered, that I could hardly understand the new. And I observe, when any Yahoo comes from London out of Curiosity to visit me at mine own House, we neither of us are able to deliver our Conceptions in a Manner intelligible to the other. (11 : 7)

しかもフウイヌム国のヤフーとロンドンのヤフーの相違はただ後者がべらべらとわけのわからない言葉を喋り、裸で出歩かないという、それだけのことであり、本質はなんら変わりはないのである。

And, is there less Probability in my Account of the *Houyhnhms* or *Yahoos*, when it is manifest as to the latter, there are so many Thousands in this City, who only differ from their Brother Brutes in *Houyhnhm-land*, because they use a Sort of *Jabber*, and do not go naked. (11 : 8)

つまりフウイヌム国のヤフーの唸り声は衣服でおおえばロンドンの人間の無意味な言葉に増幅されはするが、決して理想言語に到達することはないのである。スウィフトが『ガリヴァー旅行記』第四部において「ヤフー＝人間」を裸にしてその醜い裸体を剥出し晒してみせたのは、現状の国語の乱れも醜い裸体を衣裳で隠しただけのものにすぎず、それを剥いだところで問題の本質的な打破にはならない、という深い絶望の認識があったからではないだろうか。言語に対するこうした懐疑性にはファブリカント (Carole Fabricant) の言葉を借りれば、ある種の現実、経験を扱うための公的に確立、是認された表現形式などはいくら望んでも不可能なのだという意識が反映されているのかもしれない。⁽²⁹⁾ シニフィアンは超越的シニフィエの回りを際限なく浮遊するばかりで、決して後者が得られることはないのである。十八世紀初頭に早くもスウィフトはデリダ (Jacques Derrida) 的認識を得ていたと言えよう。以上が「言葉は思想の衣裳」の比喻を手掛りに『桶物語』から『ガリヴァー旅行記』に至るまでの諸作品を検証し得られたスウィフトの言語観に関する私なりの結論である。

注

* 本稿は1989年10月7日、日本英文学会中部地方支部第41回大会（於静岡県立大学）において口頭発表した原稿に加筆修正したものである。

(1) Ann Cline Kelly, *Swift and the English Language* (Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1988) 3.

- (2) Barbara Strang, "Swift and the English Language: A Study in Principles and Practice," in *To Honor Roman Jakobson: Essays on the Occasion of His Seventieth Birthday*, 3 vols. (Paris: Mouton, 1967) 3 : 1953.
- (3) Strang 1950.
- (4) Frederik N. Smith, *Language and Reality in Swift's A Tale of a Tub* (Columbus: Ohio State UP, 1979) 19.
- (5) Kelly, *Swift* 26.
- (6) Ben Jonson, *Timber, or Discoveries in Critical Essays of the Seventeenth Century*, ed J. E. Spingarn (London: Oxford UP, 1957) 1 : 41.
- (7) Thomas Sprat, *The History of the Royal Society of London for the Improving of Natural Knowledge*, eds. Jackson I. Cope and Harold Whitmore Jones (1667; rpt. London: Routledge and Kegan Paul) 112.
- (8) John Dryden, "Preface to the Translation of Ovid's Epistles," in *The Poems of John Dryden*, ed. James Kinsley, 4 vols. (London: Oxford UP, 1958) 1 : 185.
- (9) John Dryden, "Preface to *All for Love*," in *The Works of John Dryden*, ed. Maximillian E. Novak, 20 vols. (Berkeley: U of California P, 1988) 13 : 11.
- (10) テキストは E. Audra and Aubrey Williams, eds., *An Essay on Criticism*, by Alexander Pope, vol. 1 of *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope* (London: Methuen, 1961) による。
- (11) Jonathan Swift, *The Prose Writings of Jonathan Swift*, ed. Herbert Davis, 14vols. (Oxford: Basil Blackwell, 1957) 4 : 244. なおスウィフトの作品からの引用はすべてこのシリーズの版による。
- (12) この点は拙論「『桶物語』の言語論」『IVY』第22巻(1989年)、1-19頁参照。
- (13) Maurice J. Quinlan, "Swift's Use of Literalization as a Rhetorical Device," *PMLA* 82 (1967) : 516.
- (14) この点は Carole Fabricant, *Swift's Landscape* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1982) 251; Kelly, *Swift* 31-32; Daniel Eilon, "Swift's Burning the Library of Babel," *Modern Language Review* 80 (1985) : 274参照。
- (15) この他に何度も反復されその意味を問われる語は "Clamour" (10 : 30), "Obligatory" (10 : 38-39), "IRELAND" (10 : 39), "Precedents" (10 : 39-42), "Dependency" (10 : 84), "Liberty and Property" (10 : 100-04) 等がある。
- (16) Kelly, *Swift* 33.
- (17) John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, ed. Peter H. Nidditch (Ox-

- ford: Clarendon P, 1975) 490.
- (18) Locke 405.
- (19) Swift 10:45.
- (20) Swift 10:3, 135-36, 138-39参照。なおアーバスノット (John Arbuthnot) の『ジョン・ブル物語』(*The History of John Bull*, 1712) もこの点を突いている。従来『ジョン・ブル物語』は当時のトーリー (Tory) 党対ホイッグ (Whig) 党の対峙を背景にした政治パンフレットとして読まれがちであった。しかし主要な人物ジョン・ブルが服屋 (Clothier) であり、ニック・フロッグ (Nic. Frog) がリンネルやキャラコの小売商 (Linnendraper) であるのは、なによりも彼らが「言葉は思想の衣裳」の比喩を踏まえた語学者であることを示しているのである。とすれば『ジョン・ブル物語』作品全体もまた言語寓意物語として再解釈可能なのである。
- (21) Hans Aarsleff, *From Locke to Saussure: Essays on the Study of Language and Intellectual History* (Minneapolis: U of Minnesota P, 1982) 282.
- (22) Lewis Walker, "A Possible Source for the Linguistic Projects in the Academy of Lagado," *Notes and Queries* 20 (1973) :413-14.
- (23) ラグナグにおける言語の寓意性については Robert P. Fitzgerald, "The Allegory of Luggnagg and the Struldbruggs in Gulliver's Travels," *Studies in Philology* 65 (1968) :657-76参照。
- (24) この言葉は Ann Cline Kelly, "After Eden: Gulliver's (Linguistic) Travels," *ELH* 45 (1978) :33-54より借用した。
- (25) Edward D. Seeber, "Ideal Language in the French and English Imaginary Voyages," *PMLA* 60 (1945) :586.
- (26) Robert M. Philmus, "Swift, Gulliver, and 'The Thing Which Was Not'," *ELH* 38 (1971) 79.
- (27) Eugene R. Hammond, "Nature-Reason-Justice in *Utopia* and *Gulliver's Travels*" *Studies in English Literature* 22 (1982) :449.
- (28) Thomas E. Maresca, "Language and Body in Augustan Poetic," *ELH* 37 (1970) :374-75.
- (29) Fabricant 17.